

## 武蔵野幕屋創立52周年記念講筵

## 心と魂之靈の古里

——マタイ伝第7章13～14節、コロサイ書第3章1、3節——

1992年9月20日

小池辰雄

心の古里 過去を永遠化 魂之靈の古里 棄身の愛 神の国は汝らの中に 魂之靈の古里はキリスト自身 「9月20日」狭き門 「エンテレケイア」

## 【マタイ7】

「<sup>13</sup>狭き門より入れ、滅びに到る門は大きく、その道は広く、これより入る者多し。<sup>14</sup>生命に到る門は狭く、その路は細く、これを見出す者<sup>みいだ</sup>少なし。」(マタイ7・13～14)

## 【コロサイ3】

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト<sup>かしこ</sup>彼処にありて神の右に坐し給うなり。……<sup>3</sup>汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。」(コロサイ3・1、3)

## ●心の古里

今日は創立52周年記念の集会で、私の兄が天界に行ってから71年になります。今日の題は「心と魂之靈の古里」です。「魂之靈」は「たましひ」と読みます。非常に詳しい国語辞典にそのように書いてあった。之<sup>し</sup>という字は之<sup>ゆ</sup>くとも訓む。

「魂は靈に向かつて之<sup>ゆ</sup>く」ということ。

「古里<sup>ふるさと</sup>」は普通は「故里」と書きますが、本当は古き里です。「心の古里」と「魂之靈の古里<sup>たましひ</sup>」と、二つあるわけです。「心」は非常に幅の広い意味を持った言葉ではありませんけれども、心というものは非常に情的なものです。ハートですから。我々のハートの古里は、皆さんもみなお持ちなわけです。幼い時の忘れられない古里。

私の幼い時の古里は——本郷弓町の事はほとんどかすかしか覚えていませんが——千駄ヶ谷の幼年時代は非常に明らかに覚えていきます。「春の小川」という歌はあそこの歌なんです。あの歌の通りです。それが「心の古里」です。それから、私にとっては——小石川林町時代が小学校ですが——小石川同心町時代は、一高・東大の兄と五年間、借家暮らしでした。もう今は跡も形もありません。地震と戦争で全部焼けてしまった。その借家住



まいの二階での五年間というもの、兄が仆れるまでは、これが私の一番忘れられない心の古里です。そういう心の古里は、皆さんも何か辛い事もあつたでしょうが、思い出として、懐かしい思い出がいろいろおありだと思えます。

「ふるさと」といえば、石川啄木の有名な句がうかんできます。

「ふるさとの山に向ひて言ふことなし」

ふるさとの山はありがたきかな

ふるさとの停車場路の川ばたの

胡桃の下に小石拾へり」

まだ、いくらでもあります。石川啄木の全集の第三巻に出ています。啄木もだいぶん病氣しました。

「ふるさとを出でて五年病を得て

かの閑古鳥を夢に聞けるかな

ふるさとの寺のほとりのひばの木の

頂ぎに来て鳴きし閑古鳥」

という。

「幼い時に或るひとつの美しい思い出を持つことは、人間形成の上で非常に大事なこ

とである」

ということを一「ゴールデン・ツアイト」(黄金時代)と書いてありますが―ヒルティも言っています。その思い出はただの思い出ではない。思い出が現在化して活きなければダメです。これはゲーテも言っています。思い出が、過去の美わしいものが現在に活きる。また、過去のいろいろな間違つた歴史、それに対する認識、それは信仰の世界では、逆にそれをプラスに活かす体験にしてしまふ。それが、本当の意味で、

「過去を尊重しかつこれ乗り越える」

ということ。そういう意味で、決して水に流すことではない。

### ●過去を永遠化

偉大な人間はみな童心を持っています。ゲーテでもダンテでも。おさなごころを、純粋な童心を持たないと、その人の魂は本当に美わしくはならない。

「美わしき魂」

という言葉もゲーテの言葉ですが。キリストは幼児を愛した。これはキリスト自身が童心をもつていらつしやるから。

古里の心というもの、古里に通ずる心というものは、童心的なものである。それはいつも、自分の中で心を暖めてくれる。そういう意味で、心の古里というのは非常に大事です。古里が現在化するわけです。ドイツ語で「フェアゲーゲンヴェルテイゲン」といいますが、



過去を現在化する。過去をも、或る意味において、現在において永遠化するわけです。本当の現在というものは、そこに永遠性がなかったら、本当の現在ではない。

「永遠の今」

という言葉があるとおりに。信仰は正に現在のものであって、ただ

「来るべきものを望む」

ことばかりではない。ヘブル書の11章には、未来に対することを書いていますが、あれもやはり、現在化する気持があの中にある。未来を現在化し、過去を現在化する。それが本当の永遠の世界です。そういう意味で、古里の単なる思い出でなくて、古里の心を、心の古里を内にもつことです。

私にとつては、小池政美との同心町に於けるところの五年間というものは、いつも活きてきます。それが或るひとつの推進力になる。

私は『エン・クリスト』51号（1992年7月夏季号）に賀川豊彦先生のことを書きました。私はもつと早く賀川先生のことをしつかりと学べば良かったと思うくらいです。明治大正昭和を通じて、日本のクリスチャンの第一人者は文句なしに賀川豊彦です。内村鑑三ではない。そういう意味で、あなた方も新しく、賀川先生の書いたものはお読みなさい。いや本当に賀川魂というものは大変なものです。説明ができません。これだけの人はちよつといない。アツシジのフランシスよりももつと幅がある。本当にキリストを生きようとした人です。そして、本当に生きた。ただ、賀川先生の中にもうひとつ、御霊の天来の、もの凄い力がきていれば、もつと凄かったでしょうけれども。しかし、賀川先生の愛というのは完全にキリストの愛ですから、大変なものです。

### ●魂之靈の古里

今度は「魂之靈たましひの古里」です。我々は「心の古里」はみな持っているが、さあ、「魂之靈の古里」を本当に持っているか。私にとつては、時々申し上げているとおり、1950年の11月3日から5日にかけて大阿蘇の瀧見荘で手島さんと集会をした。三日目の、5日の祈祷会の時に、私は天界から光と力が来てしまって、坐っていた私はグツと身体がもち上がった。全身が痺れてぶつ倒れた。そして、今度は起き上がったら、もう今までと全然違っているんだ。帰りの汽車の中で聖書を読んだら、ベールがとれていた。

「今まで何を読んでいたか、聖書は聖霊を受けなければ読めない本だ」ということがはつきり分かった。

我々はキリストの直弟子のインサイダーになった。だから、私は使徒らの昔が慕わしいわけです。カトリックでもプロテスタントでもない。キリストの直弟子の次元、その世界です。何もカトリックやプロテスタントの悪口を言っているわけではない。それぞれの歴史にみな素晴らしい人がいます。



召団はキリストの直弟子の次元に向かつて進んでいく。それを好まない方は、どうぞこの集会からお去りになって、一向に差し支えない。

私は集会を1940年からずっとやってきました。少し極端な言葉でいうと、

「我独りにて酒槽さかぶねを踏めり」

だった。いろんな人が何のかんの言って出ていった。私は一人も止めない。

「ああ、どうぞ」

と。けれども、私に与えられた使命はいよいよはつきりしてきた。

「人間小池なんか見るな。その奥にあるものが本当に見えるか」

ということですよ。私よりか立派な牧師さんや伝道者はたくさんいます。私はひとつも立派ではない。立派な人を求めるなら、どうぞ行ってください、私はボロ器だから。ただ、ボロ器の中に、八方破れの者の中に、何ものも侵すことのできないものがある。それを見ている者はいつまでも私と一緒に行くだろう。それだけの話です。

大事なのは、キリストを中心にして――同じ所にいるまいが――本当に一緒に行っている、そういう魂。これが非常に大事なことです。人間はお互いさまいろいろな欠点があります。そんな事をどうだこうだと言っているうちは、いつまでたつても始まりません。

### ● 棄身の愛

私はこの頃、賀川豊彦を本当に知ってから――少し遅まきでしたけれども――賀川さんが一番親しくなった。これは本当に大変な人だから。私はとても賀川さんの真似はできません。けれども、魂の姿は賀川さんと一つである。そういうつもりで進んで行きます。賀川さんという人はその在り方においては、正にキリストの直弟子パウロとよく似ている。本当の棄身の愛です。本当の棄身の愛というのは賀川さんです。

私はこの「エン・クリスト」51号を書いたら、むしろ召団でない人たちから非常に感激して言ってきました。

「召団の人たちはいったい何を読んでいるのか」

と、ちよつと言いたくなるくらいです。

「もう小池先生の言うことは分かっている」

なんて。分かってもいいよ。けれども、頭で分かってはダメなんだ。本当に共感したら、ハガキ一本でも書いてもらいたいです。けれども、そういうのは十召団にいない。どういふことかと思う。私は涙と感激をもってこれを書いた。皆さんは、こういう魂に対して、

「こういうクリスチャンが明治大正昭和にかけていた」

ということに、本当に感激しないんですか。私は皆さんは感激していると思いますけれども。具体的に賀川さんの生涯のいろいろな細かい事を読んでごらん下さい。驚くべきことで



す。賀川さんの『死線を越えて』にも出てますが、ある時は豚小屋みたいな新川の貧民窟で一番悪い部屋に彼は住んで、そして、ヤクザ者まで相手にして愛を実践していた。賀川さんの『死線を越えて』という本が出て、これが百万部を突破した。皆、驚いた。賀川さんはその印税をいろんな方面に全部献金してしまった。ところが、やつぱりヤクザがやって来て、

「お前は俺たちのことを種にして本を書いて大儲けしたな」

と言って、賀川さんに殴りかかろうとした。短刀をもっていたから危ない。そこで、奥さんが後ろから、その男をかかえた。そしたら、そいつが賀川さんを蹴飛ばした。賀川さんの前歯が三本飛び散ってしまった。そんなことは一つの例で、賀川さんはいくたびか死にそうになっている。けれども、神さまに助けられている。もう傷だらけの病だらけの人なんです。それでも、いつもニコニコしている。絶対無抵抗ですから。この絶対無抵抗は、彼はトルストイから青年時代に学んで、その通りにやった。こういう在り方は、私は無教会では教わらなかった。ただ

「信仰のみ、信仰のみ」

で。「しんこう」の「こう」の字は、あなた方はもう仰ぐなんて書いたらダメだ。「信行」、行く、行ずる。「信交」、交わる、と書かなければ。もう古い概念を乗り越えて、どしどし進んでください。何と言われようといいいですから。

### ●神の国は汝の中」

私は仆れるまで集会はするつもりですが。月に三回。毎回、真剣勝負で私はやっています。この三回のうち少なくとも一回は是非とも来なければダメです。もし、無断で長くお休みになったら、

「出て行つてください」

と私はこれからはつきり言いますから。この福音を、命懸けの福音を、火の出るような福音をいい加減にしているなら、私はここに居てもらいたくない。どうしても来れない時は、電話なりハガキなりではつきり言つてください。

それだけの気合をもってやっていただきたい。キリストの十字架を本当に土台として、聖霊を受けたら。

「十字架・聖霊」

と私はしょっちゅう言っているでしょ。とにかく、いい加減なものが多いから。

キリストの直弟子の、特にパウロは正直大変な人だ。パウロがいなかったら、新約聖書はない。キリストは、キリストの反対の親玉をひっくり返して、最大の味方にひっくり返してしまった。キリスト・イエスという方は大変なことです。お釈迦さんなんていうのと違う。キリストの絶対性は何ものにも比較することができない。だから、



「主さまー」

と一言、全存在でもって沈黙の叫びをすれば、直ちにキリストの中に自分を投げ入れるよ  
うな、そういった祈りをしなければダメです。

「自分の実存がどうだ、信仰がどうだ、道徳的な行為がどうだ」

と、そんなことではない。キリスト、一点張り、でいかなければ、本当の力は来ません。「自分」  
なんか見えているうちはダメですから。もう私ははつきりそれを今日は言います。そして、

「いや、本当に十字架でゼロにされた根元の現実を、無の現実をいただくと、そこ  
には無限無量なものがやって来るんだなあ」

ということ、自分で体験しなければダメですよ、

「でも、私の信仰は、私の実存は」

なんて言っているうちは。

「そんなものは問題にするな」

ということ。我々はそのような気合でいく。

気合のない、何かちよつと体裁みたいなものは皆ダメ。皆さん、何をなさるので、本  
当にそのような気合でやってください。これが、

「魂たましひ之靈の古里を心の中に持っているか」

ということ、

「神の国は汝らの中にあり」

というのは、

「私がお前の中にいるはずだ。それが本当の魂之靈の世界だ」

ということ、

### ●魂之靈の古里はキリスト自身

魂という字は陰性で、靈は陽性なんです。魂・靈という字はやつぱり、天地陰陽のことになっ  
ている。天地、陰陽、男女、これはみな一つに溶け合う世界なんです。私の号によく「天」  
と付けるけれども、私の天はまた地にもなっている。天地融合の世界です。そういう渾然こんぜん  
一如の世界が本当の世界です。両極をもちながら、それがちゃんと一つになっている。

「魂之靈の古里をよく持て」

ということ、コロサイ書にもあります。

「キリストが神の栄光のすがたである」

ということが1章の14、15節あたりにでている。そして、3章、

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、  
キリストかしこ彼処かこにありて神の右に坐し給うなり。……汝らは死にたる者にし  
て其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。」(コロサイ3:1、3)



3節の、

「汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり」

という言葉です。我々の魂之靈の古里はキリスト自身である。キリストと一緒に神さまの中に隠れている。これが魂之靈の古里なんです。皆さんは、いつか、聖霊を受けた体験があるでしょ。

「御霊に撃たれたら、御霊が入ってきたら、確かに私は違った世界に入った。相対的自分は滑ったり転んだりしているけれども、実は、しょっちゅう前進してやまなくなってきた」

ということに、皆さん一人びとりは聖霊を受けると、そうなる。聖霊というのは推進力だから。御霊に替えられるものは世界中どこにもない。驚くべき内容です、この聖霊というのは。無限無量の内容です。キリストの霊だから。その人を通して限りなき展開を始める。そういう原動力を本当に持っていれば、それは聖霊の力です。一人びとりそれぞれ使命がありますから、人真似はひとつも要らない。この力がくると、楽しくてしょうがない。私が詩を書いているのも楽しい。それは大変な仕事だけれども、楽しい仕事です。私にとつては、詩を書くことがもう天的な現実です。楽しくてしょうがない。皆さんも、何をなさるのでも、それが天的現実であるということ。それが、本当の魂之靈の古里を持っているということなんです。そういう、何ものにも替えることのできないところの、力と光と生命と喜びと愛というのが聖霊の世界です。相対的にどんな事にづくわそうが、逆に力がくる。反比例して。絶対にへこたれない。

私は語りながら、あなた方は聴きながら――語るも聴くも同じこと――キリストの現実に入つて、そして力を得て帰っていくんだから。お説教なんか聞いているのではない。聖書を読むことが直ちに祈りの現実となる。また祈禱会をしなくてもいいんだ。

### ●「9月20日」狭き門

著作集第十卷（『聖書は大ドラマである』はよく読んでください。これはどの頁も私の大告白ですから。十巻の9月20日「狭き門」の項に、

「<sup>13</sup>狭き門より入れ、滅びに到る門は大きく、その道は広く、これより入る者多し。<sup>14</sup>生命に到る門は狭く、その路は細く、<sup>みいだ</sup>これを見出す者少なし。」（マタイ7・13～14）

キリストの福音は大眾のものではない。誰でも入れる。けれども、本当に入れる者は少ない。この「狭き門」はなかなか通れない。みんな余計なものを持っているものだから、通れないんだ。裸一貫でいい。

「……神・キリストの門は狭い。それは各人が裸一貫で何も持たずに体当たりする門で



ある。十字架という門だ。この関門に体当たりしてぶっ倒れて「透得」すると、自我、我執が贖われているので「乾坤独歩」することができる。天の「大道は無門」である。聖靈の風の吹く道であるから。『無門関』という禅宗の句も、キリストの十字架と聖霊を体験すると楽になつてけるのである。地路は各人の足で歩く路である。一人ひとりのがのっぴきならぬ路を歩かせられる。それが運命環境の特殊性であり、人生なのである。「千差路あり」とはこのことである。その路を歩くに当たって神・キリストを路案内とすると行きつまりを知らない。人生風雨あり、荊棘あり、岩石あり、しかしまた真清水あらばキリストを飲め、葡萄の房あらばキリストを喰え(ヨハネ6・55～58)。キリストを飲みキリストを喰い、キリストを道案内として歩く細路が生命の路で、そういう地路は即ち天道なのである。」

そういう文章を書いた。こういう文章は、私はキリストの句を読んで、聖靈ののっぴきならない押し出しでもって書いている。いわゆる注解ではない。第十巻は一番大事な巻ですから、よく読んでください。この中に聖書が全部集約されて入っているから。私は、感激する人が好きなんだ。感激性のないのは厭だね。今の青年は感激性が非常に乏しくて、学校で教えていてもくたびれてしまうという。相手が感激しないものだから。私が今教えたら、怒鳴りつけるかもしれないよ。

### ●「エンテレケイア」

魂之靈の古里は、やがて新天新地にやつて来ます。しかしまた、魂之靈の古里は現実――先程、コロサイ書で読んだように――現実にはキリストの中にあつて有つている。歴史的終末的な望みと、現在の終末を持つているところの現実と、これがちゃんと二通りあるのが、信仰の本当の現実なんです。そして、心の世界と魂之靈の世界が渾然一つになっている。「心・魂・靈」と、パウロの書簡の中にも出ています。この心・魂・靈が渾然一体となつているのが本当の人間です。融合同化している世界。何でも、本ものは溶け込んでいる世界です。

海の水を見て、塩が見えるか？ 塩は見えない。塩は見えないけれども海の水は辛い。塩が溶け込んでいる。大変なものだね、この海というものは。いろいろな悪いものが注いでくるけれども、全部これを塩辛くしてしまう。魚が生きている。大自然というのとはかく凄い。この大自然をいい加減なことにしたら、世界はとんでもないことになる。21世紀はどうなるか知らんよ。

皆さんは、この集会に来て、男の方でも女の方でも、烈々たる魂になつてくださいます。これは、どんな嵐がきても、消えないところの火です。

こないだ、私は「火の民」という讚美歌を作った。日本は火山国でしょ。温泉が出ている。だから、日本人は火の民なんだ。それなのに、火のような魂が非常に少ない。



「我れ火を投ぜんために来たれり」

と、キリストが言われた。我々の霊火である。その霊火を投ずる。御霊の真理の前にはひとつも恐いものはない。

先程、「融合、天地一如」と言いましたが、

「エンテレケイア」

というギリシア語の字がある。

「充<sup>も</sup>全に有<sup>も</sup>っている」

ということですよ。魂がエンテレケイアの魂であること。ゲートがそういう人間です。キリスト・聖霊を受けると、充<sup>も</sup>全にもっている。コロサイ書に、

「キリストは満ちたるものにして」

と書いてある。

「キリストは充満の人間である」

ということ。聖霊をいただくと、我々はみな充満の人間なんだ。エンテレケイアである。充満というのは質的ですよ。何でもかんでもある、ということではない。質的に充満性である。一人びとりの充満の内容はいろいろだ。充満的な在り方にされている。魂之靈の古里の主体は聖霊ですから、聖霊が内住してくると、充満的な、エンテレケイアの人間になる。皆さんは、何だかしらないけれども、非常に豊かなひとになる。貧しきの極みに入ると、豊かさの極みになる。それが、

「ゼロ＝無限大」

の世界です。

「少しづつやって段々満ちて来た」

ということではない。自分を棄ててかかると、棄身でかかっていると、充満する。賀川さんがそうなんです。彼は棄身の愛です。棄身で行っていると、充満する。彼は自分のことは何も考えていない。そうすると、彼自身は充満の人間で、みんなに驚かれています。大変なひとだと。賀川さんというひとは、私物は一つもない。みんな、上から受けとったもの、人にやるもの。もちろん本やなんかをたくさん持っていましたよ。けれども、自分の物とは思わない。

私はこうやって、あなた方に、時々感激してはものを言っているけれども、どうぞ、その内容を、火花をちゃんと散らしてくださいよ。そして、どうぞ、周りの人たちに一対一の伝道をしてください。

まあ、これで大体、あなた方と気合が合ったと思うから、この辺でやめておこう。

